

特集・都市の魅力―第三の生活空間⑥

遅れてやってきた都市空間への欲望

今井 信二

機能都市から新たな都市像の形成へ

私たちが住んでいる都市という人間独特の群れの形態は、既存の価値基準を解体するような思考の枠組が、生産手段などの具体的な形と結び付いて高度に発達した時、これまで大きな変貌を遂げてきた。その中でもイギリスの産業革命期のように飛躍的に発展を遂げる時期があるものだが、第二次世界大戦後の日本の大都市もその顕著な例に挙げられるに違いない。高度成長経済の社会での都市変革は、機能的に優れたものが善であるという、近代主義の光を真正面から受け止めて発展し、事実いろいろな分野で可能性の扉を開いてきた。現代都市は、エネルギー

ギーを使いたいだけ使い、作りたいものを作りたいように作り出し、いい意味でも悪い意味でも人間という動物の欲望を最大限発揮することにより、技術革新を続けてきた。成長発展と機能主義に裏付けられた近代主義は、ダイナミックに時代を動かし、機能で満たされた知識集約型の都市を作り上げた。

しかし、都市が機能的になっても、人間は機能的に優れているだけの場所では生きていけない。都市の主人公は、やはり、そこに住んでいる人間であり、人間が生きていくということは、経済活動を越えて、もっと総合的なものである。これまでの大都市の特性は、常に経済が成長発展するという条件設定の中でのみ有効性を持ち

得たが、反対に成長がもたらした不測の事態に對して、誰も責任を持ってなくなっている。こうした発展志向の欲望と欲望がぶつかりあうところ、意識しないところで摩擦を発生させ、現代都市で経済活動をしている人は、だれも傷つけずに生きてはいけない。

また、このように都市が変貌していく過程で、それまで空気のように自明のものとして存在した隣近所や商店街といった古い安定したコミュニティを、物理的に壊していったし、物理的に壊さないまでも、生活の変化は、隣近所の地域コミュニティとの関係が、より希薄となる方向に推移していった。都市住民は家庭や職場ではコミュニケーションを確保できても、そのよう

- 一 機能都市から新たな都市像の形成へ
- 二 文化的空間の形成へ―自己表現の空間とそれを繋ぐネットワーク
- 三 質の高い公共財と公共空間の連携
- 四 新しい都市の核―接近可能な公共空間とコーディネーターの役割

な空間を離れた時、一人一人の孤立した人間が、都市空間の中で人と人とを繋ぎ止めるぬくもり、安心、心地好きといったものを、体験しにくくなっていく。古典的なコミュニティが解体されることは、時代や生活方法の変化によりやむを得ないとしても、それに変わり一人一人の人間を繋ぐ新たなコミュニティ像を都市空間の中で作り出していくことは不可欠のことである。

無論こうした近代主義が抱えた袋小路へのアンチテーゼとして、脱近代に向けた人間像について、様々な考え方が出されて時代をとらえようとしてきた。脱近代の手法は、原因があつて結果があるといった合理主義の呪縛から逃れようとしてしきりにパラダイムの変換ということをいう。関係性を、ある状況を持った場の中で捕えたり、存在を記号や象徴として扱い、無意識の構造に注目したりしてあまり進歩ということとは考えない。しかし、脱近代の考え方は、近代合理主義が作り出した浪費の経済構造の上になら、人間の関係性を作れないという現実の前に、あまりにも無力なのだ。また、旧ソ連の崩壊で、未来はユートピアに向かうという神話もなくなり、未来社会を確実に描けなくなったという事実は、表現すべき理想社会の不在を意味していて、結局のところ、何をやっても試行錯誤の繰り返しという次元を脱し切れないうる。

つまり、近代主義によって作られた大都市の問題点は様々に指摘できるが、それを越えるような考え方や手法は、容易に手には入らないのである。都市の中で人間のあり方も、手探りの中で出口を探しているのが現状なのだ。ただし、確実に言えることは、人間が都市の主人公となるためには知識集約型の現代都市が、古典的なコミュニティに代わる新たなコミュニティを形成する都市空間を、どのように作っていくのかという課題に、具体的な答えを出す必要があるということだ。この新たなコミュニティの形成に関する遅れてやってきた都市空間への欲望は、都市の成熟という課題と直接係わっており、そこに暮らしている市民が、本当の意味で都市の一員としての市民となることに、係わっている。

建築家槇文彦氏はその著『記憶の形象』の中で現代の都市の状況について、次のように問題提起している。

「最近私は、この都市なる概念は次第に意味がなくなりつつあることを実感し始めている。つまり、都市なるものはかつてのように一言で言い表すことが難しくなるとともに、見えなくもなってきた。都市的Vなものを感じられても、都市そのものは実体として把握できな

くなりつつある。ポスト・シティ・ソサエティとでも称すべき時代に入りつつあるといっている。」(二百五頁)

この文章に続いて、モダニストを自認する著者は、新宿副都心やみなとみらい21等の新しい都市の断片から谷中や佃島等の古い都市の断片まで、現代の大都市の構成が、相互の有機性が無く、都市的断片の集合体となってしまっている現実を踏まえて、今世紀中のさし迫った課題として都市を否定的に再構築することを提言している。

槇文彦氏は上記の文章の中で、都市を否定的に再構築する方法を具体的に指摘しているわけではないが、私も同じように都市を否定的に再構築する必要性を感じている立場から、都市の最小単位である個人個人に関わる文化的空間を考えることで、問題に迫ってみたいとおもう。

二——文化的空間の形成へ——自己表現の

空間とそれを繋ぐネットワーク——

都市が生産と消費の循環効率を追及する狭間で、職場を離れ、家庭を離れた時の個人がもつと日常的に無心となって感性のアンテナとなる時、なにを受信できるのかという可能性は、都

市が新たな都市像へ脱皮するための、掛け替えのない栄養になるのではなからうか。それが例えばGNPを押し上げる仕掛けに繋がらなくとも、未来都市のありうべき形を考えるうえで確実に役に立つと思うのだ。日本の都市が全く未到達の世界に向かって出口を探している今日、都市が人間を受け入れる仕方において、個人が個人に帰ったとき、自分自身を表現する空間とその個人同士を繋ぐネットワークの空間を用意することが、必要になっている。それこそが、都市的な断片を相互に織り成す結び目になると考えるのだ。下水道の普及率やミニマムの市民利用施設が満たされてきつつある現在、都市の容量としても、ようやく横浜でもこうした問を求めることができる状態にきている。私たちが生活していく町が、機能だけではなく個人が個人に帰ったとき暮らしやすいことを文化的に言うならば、街はどのように文化的になっていくのか。

都市に住む人間を個人レベルで見た場合、ある程度の収入と仕事と住居を確保できたその先に、これまでのように波を打つような流行に身を任せるといことがなくなってきた。高度成長社会の頃に流行った、お隣さんがしたから私も、といった傾向のつまらなさをもっと見せてしまっている。欲望の質も確実に変わっているのだ。

しかし、事あるごとに枕詞のように言われている「物を大切にす時代から心を大切にす時代へ」といった言い方で、来るべき都市の成熟を簡単に語れるとは思わない。人間の物への執着はなくならない。だから、むしろ「大量生産の物から差別化された物へ」という方が時代を正確に捕らえている気がする。飽く無き欲望の修羅場としての都市像の方が、どうも活性化への道であり、遥かにありそうなことだと思ふ。

しかし、「差別化された物へ」の欲望とは別に、現代の都市住民が「物から心へ」という欲望を、本気で自分のものとするつもりなら、一人一人が個人としての自分をもっと見つめる覚悟が必要だ。「物から心へ」という転換は、思い付きとしては良くできているが、ちょっと考えてみるとそれほど易いことではないのだ。なぜなら物は形として手にとって見られるが、心は何時でも捕らえどろがなく、自分のコントロールを越えているからだ。心を大切にすとは、自分の中で芽生えた問いを自分を律しながらしっかりと追いかけることだ。これはある意味では哲学的な行為であり、生理的な欲望を越えたところで行われる営みである。なにかにとり憑かれたような顔をして忙しがつるサラリーマンが、職場や家庭といったあらかじめ路線を決められた生活から離れるとき、未知の自分に出会うと

する。自分が一体何を考えているのか、なにを信じているのか分らないという状態こそ、大切にすべき自分の固有のフィールドの中にいる状態なのだ。この固有のフィールドを大切にできた時、「物を大切にす時代から心を大切にす時代へ」の転換が図られたといえる。

そのとき一体自分の前に何が見えるのだろうか。これまでの日常の中では何も見てこなかったなと気づくことがあるものだ。見えないものが見えたその日こそ、松任谷由美(ユーミン)がアニバーサリーという曲の中で歌うようにまさに記念日なのだ。「なぜこんなこと、気付かないでいたの、探し求めた愛がそこにあるの」、そうして探し求めた愛に出会った日は「ありふれた朝でも私には記念日」というわけだ。もちろん、ユーミンは愛の世界だが、未知なる自分に出会う日も全く同じだと思う。こうした未知の発見は人によって違うだろうが、やはり見たり聞いたり感じたりすることから始まり、他人との情報交換やある種のイメージトレーニングの中で深まっていくものだ。

例えば、音楽であれば目の前の風景と一体となって、何かの動作の中で何時か聞いたことのある音が突然鳴るとか、演劇であれば、劇中の人物が現実の人間よりもっと現実味を帯びて立ち現れ、夢枕に立つといった状態に出会うと

か、工芸の分野だったら、手を使ってなにかを作る時、上手とか下手とかという問題をおいても、各人固有の形があるといったことに気づくことがあるはずだ。

こうした一人一人の市民の中に基盤を持った文化が、運動として大衆の欲望となった時代が日本にもあった。江戸時代の後期、江戸を華やかに飾った浮世絵や歌舞伎・人形浄瑠璃の興隆の時がそうだ。武士階級の素養として当たり前であった能の世界だって、毎日のように面をつけた亡霊を現実の人間として蘇らせて見ていたのだ。

横浜でいえば、明治初期から大正末の関東大震災まで、流入した外国文化が、日本の風土で新たに育っていく発信基地として、都市横浜の黄金の時があった。

今の時代、心の記念日を持つ人の輪が少しずつ増えていくことが重要なのだが、それには都市の中にそれなりの仕掛けがないと、自然発生的に増えていくことを期待するのは難しい。つまり、都市の中で個人が自分の時間を自由に使える都市空間の課題は、優れたサロンとしての空間と、コーディネートを専門とする人の配慮をどれだけ仕掛けられるのかに掛かっている。これは正に公共空間をどの様にしたらいいのかという課題とリンクしている。何故なら、利益

や特定の目的に関わって、ある程度フリーハンドで事を為せるのは公共空間において他に無いし、その気になればパイオニアとして、大きな役割を果たすことができるからだ。公共空間は、将来的に都市を有機的に活性化させ、市民の切実な欲望となるような空間とすることができのだろうか。この問いに肯定的に答えられる時、都市は変わるのではなからうか。

三——質の高い公共財と公共空間の連携

しかし、言うは易く、状況はそれほど甘くない。

まず、公共空間を作ってきた側のことを考えると、これまでの公共空間は、どのような考え方で作られてきたのだろうか。現在の公共空間の考え方は、公共施設を例にとれば公共の側が、公共のために個人の力を引き出すための機能、次に地域コミュニティのための行事や集会を果たすための公民館的機能、次に高度な文化活動に対応する機能、というように高度化が図られてきた。高度になったとはいってもやはり、公共施設はグループでの利用や鑑賞が主体で、個人が個人に帰った時、気軽に足を向けるようにはできていない。公民館的な段階までは誰もが納得できて、そこから飛躍していくとき、施

設の選択はなかなか難しい。それは確かに事実だが、あまりにも機能的な意味だけで満たされている公共施設から、遁走しない限り何も始まらない。音楽・演劇・美術等のための高度な文化活動に対応する施設が、ハイテクを駆使して他都市に対抗できるようなものとなっていくのは、ある意味では当然のことだ。しかし、そうした施設を作ることだけが目的となつては、本来転倒になってしまう。誰がどのような状況の中で施設を使用するかが重要なのだ。また、これらの施設が都市の空間構成の中で、他の公共空間やそれに準じた空間と一体となつてこそ、施設が生きてくると思うのだ。

公共施設を中心とした公共空間に準じて、都市の中で公共性をもった空間としては、例えば家屋を中心とした街並みのファサードや豊富な緑の空間及び民間の展示施設等がある。一歩自宅を出てこうした空間に接すれば、そこには、そこに任んでいる人間の表情や息づかいが感じられ、都市住民にとって情報提供の場であったり、安らぎの空間であったりする。その質が良からうが悪からうが、この私的な空間と外部空間とがせめぎあう間こそ、ある種のコミュニケーションが存在し、新たな発見を生み出す揺籃となるのだ。こうした空間を公共財として位置付け、公共空間と有機的に連携することにより、

公共空間をより効果的なものにする可以考虑。

その公共財の質が良ければ、理屈抜きに異空間に私たちを案内してくれる。古い宿場町や京町屋など日本古来の意匠が連なる街を歩くときの心の安らぎや美しさの実感。それらの魅力の要素をあげてみると、町並み全体に軒の線が繋がっていること、屋根勾配、棧瓦の統一の取れた佇い、総二階建が禁止されていたが故のプロポーションのよさ、真壁や出桁づくり等に見られる木造軸組工法の力学的な自己主張がそのまま外部から見て取れる美しさ等々具体的に指摘することはできるが、つまるところ、便利さとは縁遠い歴史性にある安らぎが感じられるところが重要だ。街がきれいになったり、便利になったりといったことだけでは満たされないこうした安らぎの空間には、都市の秘められた奥行きが感じられ、尽きない魅力の脈が眠っているように思う。城下町ではない横浜では、山手の西洋館群や都心部の近代建築の細部の意匠は、都市の臍にも当たる部分で、この歴史性の中に大きく包まれた安心感のような物が眠っている。

また、緑が失われている都市に、緑の公共財を導入することも、都市を再構築するうえで大切な要素なのだ。このことについては、多言を要することはない。地球環境の破壊というところにも大きな問題は、空が落ちてくるのを心配するのに似ていて日常は考えないことではあるが、そのうち光化学スモッグ注意報と同じようにオゾンホール注意報が出たり、必至になって守った虎の子の森林が、瞬間に酸性雨で枯れ果ててしまうなどということが突然起こるかもしれない。私たちの時代の都市は、そうした危うい土台の上で成り立っていることを念頭に置いておく必要がある。都市の広場に人工的な工作物を置いて芸術性を楽しむのも意味深いことだが、一本のケヤキが広場に置かれたときの四季折々の微妙な表現力を見せつけられると、緑の公共財としての意義も劣らずに考慮したいものだ。こうした考えは、建物の外部だけでなく、公共空間の内部と接続する部分においても導入できることだ。例えば、緑の辺りでくつろぐ青年からカメラを引いていくと、その場所は実はビルの屋上だったというシーンを、最近ニュースステーションのタイトルバックで表現しているが、このシーンを彷彿とさせるような施設が東京の谷中にある。朝倉彫塑館という名称で一般公開されている施設で、もともと、我が国の近代彫塑の基盤を確立した朝倉文夫氏がアトリエ兼住居として昭和九年に建てたRC造の建物である。館の中央には湧水が涌く池があり、屋上は町中のビルの上とは思えない緑の空間となっている。よくぞこんな建物を昭和一桁台に

建てたものだと感じてしまうが、一見ミスマッチと思えるようなこうした施設の中にこそ学ぶべきヒントがあるのではなからうか。コンクリートスラブ上の緑の空間や、緑の中庭を取り囲む公共施設等を、積極的に考えていいのではないかと思う。自然の力を借りて、単なる機能だけでなく、奥性を秘めた空間を都市の中に持つということは、人間の気持ちを変えていくものだ。

四——新しい都市の核—接近可能な公共空間とコーディネーターの役割

つまるところ、公共空間は市民に接近可能な条件があつて始めて欲望と結びつく。市民の生き方は、自分自身でさえ予想もしない道を歩むことが多々ある訳だから、ある目的だけで作られた公共施設が、都市の真ん中で城のように聳えていても、都市機能を有機的に結ぶ仕掛けとはならない。市民が自分の人生を町中に出かけた時思いもかけず発見するということがあるように、そうした発見性を秘めた街の延長上に公共空間が欲しいのだ。ハード的には町中のファサード性や、界限性といった要素を取り入れて、目的を持って出掛けていく市民を対象にするだけでなく、公共空間のサラウンド的な空間で、自分の生涯の課題を発見するという風になることに

よって、都市の各パーツに血液を送る心臓になることができる。

こうしたハードの対応の中で、人に出会えることが大切だ。自分の方法を発見することは、他人の方法を見ることがいいきっかけとなるはずで、個人と個人を繋ぐネットワークを作り出せる仕掛けは最も力を入れる分野だと考える。これからの自治体は、法律の番人としての機能のほかに、市民が抱える問題の核心は何なのかを的確に指摘するようなコーディネーターとして、サービスに徹することが必要だ。これまでの専門家は、自分の専門分野の蝸壺の中から出

ないことが専門性であったが、現実的な問題点をコーディネイトして解決する専門性こそ、公共性ではなかるうか。無論、こうしたことは、その街の市民の欲求があってできることだ。所詮、公務員はその街の市民の力量に応じた顔をしている。そうした意味では、公共性の質は市民の側にあるといえる。

このようにして、コーディネーターを介して個人の変化があり、街全体の雰囲気上がり、市民が集う空間への欲求が生まれる。これに対して公共空間の側でも、あそこへ行けば何か新

しいものに出会えるという施設が生まれ、そうした施設が市民の手軽な欲望となる。こうした循環が生まれ、市民の優れたサロンとしての公共空間が街をネットワークするとき、個人が個人に帰ったところで連帯へと導く新たなコミュニティの空間を形成することになる。そして、この遅れてやってきた都市空間への欲望は、断片的な機能が集積しただけの都市を有機的に結び付け、新しい都市の核を形成すると考えるのだが。

△市民局市民文化部文化施設課担当係長▽